

日本社会福祉学会第61回春季大会（2013年度）報告

全国大会運営委員会委員長 金子 光一（東洋大学）

2013年5月26日（日）13:00より東洋大学白山キャンパス6号館6101教室で、第61回春季大会が開催された。

まず、開会の挨拶で岩田正美会長がご自身の体験に基づいて、今回のテーマの重要性について述べ、その後、コーディネーターの山辺朗子会員（龍谷大学）が、今回のシンポジウム（テーマ：「当事者と向き合う専門性とは何か」）開催の趣旨説明を行った。

まず、田嶋英行会員（文京学院大学）が、「世界＝内＝存在」として存在する当事者の「世界」に向き合っている専門職は、同時に自らの専門職としての当事者性を基盤にしつつ、その専門職としての「世界」のうちに存在しているという立場から、ソーシャルワーカーの専門職としてのあり方を提示した。

次に、小西加保留会員（関西学院大学）は、当事者の議論は「価値」の問題であるという立場から、「当事者」という言葉の使途の多義性を踏まえながら、「当事者」議論における視座と社会正義に向かう展望を述べた。また、社会正義に関わらせて「価値」と「関係性」の議論を整理し、社会福祉学原論として取り上げるべき重層的な課題があることを示した。

さらに、沖倉智美会員（大正大学）は、障害者本人・関係者・ワーカー（支援者）の当事者性を踏まえた上で、「自己決定」を再考し、「支援つき意思決定」の理論と実際を、当事者とワーカーとのパートナーシップに基づく「二者間の合意形成」と支援ネットワーク構築による「多次元の合意形成」の側面から紹介した。また、意志決定プロセスの重要性を、アセスメントとプランニング、支援ネットワークの運用、「当事者性」を育む支援、ワーカーの実践を支えるもの等の視点から提起した。

最後に、松田博幸会員（大阪府立大学）が、ソーシャルワーカーの生の過程は、ソーシャルワークの過程の中でどのように位置づけられるのか、ソーシャルワーカーの生の過程とクライアントの生の過程とがどのような関係にあるか、という二つの問題関心の下で当事者を捉える必要性を述べ、研究者の生の過程に焦点をあてたオートエスノグラフィーが、この課題を共同で探究する方法として有益であることを、自らの体験を紹介しながら論じた。

各シンポジストの報告が終わった後、休憩時間を使って質問用紙を回収し、後半はその質問に答える形で進められた。会場からは大変多くの質問があり、今回の報告に対する関心の高さが窺えた。

コメンテーターの小山聡子会員（日本女子大学）は、今回の各シンポジストの報告から「当事者と向き合う専門性」は、きわめて多岐にわたる議論を含んでいることが確認できたとした上で、専門技術者のようなソーシャルワーカーは属性からいって好ましくないが、第三者にソーシャルワーカーの専門性を明確に示す必要性もあり、そこに根本的な困難性があると述べた。また、施設職員であるソーシャルワーカーがもつ「職業構造の限界」も同時に考える必要があることを指摘した。

最後にコーディネーターの山辺会員から、このようなテーマでシンポジウムを行ったこと自体に意義があり、これからも継続的に議論を行い、それらを蓄積していくことが重要であると述べ、本シンポジウムを締め括った。

ソーシャルワークの「専門性」を巡る議論は、逆説や矛盾の要素を含むきわめて困難な

側面がある。その困難性を踏まえた議論が本シンポジウムで展開できたと思う。参加者は、152名で昨年より若干少なかったが、障害をもたれた当事者の方や現場で実践に関わっている方が多く参加されていた。このことは、今回のテーマが、今後様々な立場の実践を主眼として積み重ねていく必要があるものであっただけに大変喜ばしいことであった。